

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 87: 63-104
Issue date	1901-10-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5233
Right	

雜 録

卒業證書授與式

七月一日本校工學部第一回、大學豫科第九回卒業證書授與式を舉行せらる、午前九時職員生徒及び卒業生父兄、來賓諸氏式場に着席、櫻井校長は前學年に於ける學事報告をなし、終りて工學部卒業生九名、大學豫科卒業生百二十七名に對し、夫々卒業證書を授與し、懇篤なる告辭を與へられ、次に神谷工學部主事、渡邊教頭は各職員總代として、西門善三郎、山邊武彦の二氏は各生徒總代として祝辭を朗讀し、工學部卒業生總代池神重政、大學豫科卒業生總代中根貞彦氏の答辭あり、夫れより法科卒業生百武泰彦氏は三年間皆出席の故を以て賞狀を授けられ、午前十一時式全く終る。正午より更に瑞邦館に於て卒業生送別茶話會を開き、餘興として能、狂言、筑前琵琶等の催しあり午後四時全く散會。

卒業生氏名は左の如し。

○工學部第一回卒業生

土木工學科

池神 重政 椎崎 寅助 中隈伊勢吉

久保田 實 平野 海彦

機械工學科

小籓 善 松下 三郎 別庄易太郎

宮崎 祐助

○大學豫科第十回卒業生

第一部法科

政治 中根 貞彦 法律 鷺尾 健治 同岩田 衛

同勝 正憲 同野依 辰治 政石神 長助

同萩原玄太郎 法島内 勇 政金崎善太郎

同司城 元義 同豊田多賀雄 同村井 正記

同古賀 傳吉 法三田 善喜 政村上 伸雄

法水野 忠行 同野守 廣 政高橋久太郎

法浦川 忠藏 政柳川 眞榮 法島田 敏三

政吉田 清志 法紀伊 寛平 同奥村 政雄

政板井勘兵衛 法小野 正一 政西井 三郎

法中山左五郎 同宇木 幸吉 政津末宗太郎
同阿形 輝司 法永口 隆三 同池田 隆作
政朝日 胤一 法河野 通博 同志波原諭一
政小河 愛吉 法宮下 清彥 同鶴山 三郎
同鳥越 盤 同村上 憲次 政飯田茂登雄
法園田 嫡男 同森田 廣 政中尾 一良
法福富千代馬 同川瀬 寅二 同松野 與
政百武 泰彥 同黒部 寅一 法永松 志一
同近藤映三郎 同多田 吉彌 同戸澤民十郎
同貝田晃之助 同福田 五郎 政小磯 實

第一部文科

獨横山 良盛 國文成田 忠良 漢石川 重治
哲岡島 誘 國文堀 角平 哲藤井 專隨
國史柳井 幸弘 英東 善平 英北郷 二郎
國史中村 護 哲柴山 槐郎 國史黒木秀治郎
國史谷 龜雄

第二部工科

土木倉塚 良夫 探鑛 堀田 正一 電氣多田 耕象
同中村 嚴 造船 江中 六助 船舶 今里 尙

造兵石川 重遠 機械的場 啓藏 電生田 一二
探岩岡 豐彥 採川關 等光 採大森偉一郎
造伊藤忠次郎 電下田 幸八 機械戸 季吉
舶鬼 一郎 土松本 虎太 土鶴見 宜清
採上田 徹 土田口 俊一 舶石川登喜治
土永屋 昌雄 採小野田泰助 造井上大九郎
造德永 吉次

第二部理科

物理具原 良介 數學磯野 正登 植物赤松邦太郎
物理齊藤 豐喜 地質林 勝見

第二部農科

農學高石政治郎 獸醫守田猪一郎

第三部醫科

醫學諫山 直 同吉富 惠 同星島 徹太
同山田駿三郎 同高橋淺太郎 同高橋 忠策
同副島豫四郎 同近藤 直枝 同鶴岡龜和武
同白川彌源太 同八田 千町 同土屋 龍男
同福島 尙純 同井上 成美 同西村浩次郎
同澤村 榮美 同鶴見 三三 同松本 章太

同丹村 泰介 同荒木 直治 同大島 信禮
同川野 茂彦 同井上 健兒 同堀口 正文
同橋本 令亮

又當日の學事報告ハ左の如し

一 生徒 本學年末現在生徒工學部に於ては今回の卒業生を加へ百二拾名大學豫科に於ては同卒業生を加へ五百三拾四名計六百五拾四名なり

前年七月より本年六月に至る入學者及退學者の種類員數を擧ぐれば左の如し

一 入學者 工學部六拾六名大學豫科二百四名計二百七十名なり

内

再入學せし者

二名

中學校を卒業せし者

二百五十名

一 退學者 工學部三拾名大學豫科六拾三名計九拾三名なり

内

願に依り退學せし者

八拾四名

除名の處分を受けし者

八名

死亡者

一名

本年の始めに於て工學部第一級生徒補欠さてて中學校卒業者に就き二拾名を再度募集せしに志願者豫定人員に

超過したるを以て遂に入學試験を施行せり又來學年に於てハ工學部第一級生徒凡六拾名大學豫科第一級級生徒凡二百五名を中學校卒業者より募集す

其志願者工學部は豫定人員に超過せざるを以て無試験入學を許すもさし大學豫科は豫定人員に對し三百五拾七名超過せしを以て入學試験を施行するに至り

二學科 工學部學科は前年に異ならず大學豫科に於ては本學年學科課程を改正し第一部文科に於ける地理、動物、植物の各學科を省き法學通論を加へたり其他概して各學科の授業時數を多少増減し殊に第一、第二、第三の各部を通じて大に外國語の時數を増加せり又た本年卒業生に於て改正の課程に據り難き學科は新舊規程を斟酌して教授するにせり

三教員 教授三拾名助教授四名囑託教員二拾三名雇外國教師三名計六拾名なり

四卒業生 工學部は明治二拾七年勅令第七拾五號に基き明治三拾年四月文部省令第三號によりて設立せられ茲に四年の星霜を経て第一回の卒業者を出すに至れり而して本年卒業すべき生徒は去る明治三拾年七月中學校卒業生に就き募集せしものにして當時五拾七名なりしハ本日證書を授與せしもの九名となれり卒業の難き想ふべし之を學科に區別すれば土木工學科五名機械工學科四名にして其

年齢は最長二拾五年二ヶ月最少二拾二年二ヶ月平均二拾三年七ヶ月あり而して既に之を採用を申込たる官廳會社の數は遙かに卒業生の員數に超過し悉く供給し能はざるを遺憾とす、

大學豫科卒業生は百廿七名内三名は他高等學校より轉學せし者一名ハ本校舊豫科より進入せし者百廿二名ハ中學校卒業の上入學せし者あり之を學科に區別すれば法科五拾七名文科拾三名工科二拾五名理科五名農科二名醫科二拾五名にして其年齢は最長は二拾七年八ヶ月最少拾九年二ヶ月平均二拾二年八ヶ月なり

新學年來

六旬の休暇夢の如く過ぎ、前川の香魚已に肥け、後園の葡萄正に熟せんとせる秋風と共に郷關を出で折柄復び龍山々下に來り依然たる風物を見榮然として雜誌部の机により筆を走らして新學年來の辭を書かんとすれば感も亦多いかな。

回顧すれば本校創立以來茲に十星霜これを天地の無窮に比すれば一轉瞬のみ、然れどもこれを一世紀に比すれば十分の一にして、所謂人生な

るものに較すれば五分の一也、故に吾人より見れば豈一轉瞬の比ならむや、吾人は實に此の十星霜の間に於て幾多の變遷消長を見る也換言すれば吾が校の歴史には語るに足る可き多くを保つと云ふもの也、而して龍南會雜誌は吾が校の歴史なり、是を讀めば夫の凡を知る得、就中殊に吾人が注意を引くは十星霜の間に於ても尙且つ校風の興隆銷沈時によりて免れざるることあるの一事也。即ち創立當時の剛健朴實なる風尚は年々歳々にして衰へ、今や奇骨稜々、千里の荒野を孤行する底の膽氣ある先輩諸氏につきては雜誌の中にさへ語る者あらざる也、況んや自ら彼の奇骨と彼の膽氣とを期せんとするものに於てをや又た長大息せざらんするも得可からざるなり。

吾人は現在を呪はんが爲めに過去を謳歌する者にあらず、又過去を以て金碧爛燦たる黄金時代となすものにもあらず、唯先輩諸氏が山あれば越紅水あれば涉り、勇往直進、如何にも剛健な

りしを慕ひ、師あれば尊ひ友あれば愛し、恭敬和睦、如何にも朴實なりしを想ひ、鮮なくとも目下の惰眠を醒覺せんとするもの也。吾人はかくの如く過去の長所を説くと雖も、素より彼の酒を被りて慷慨淋漓、趙燕悲歌の士を以て任する者を學生の摸型となす者に非らず、彼は已に陳腐也、二十世紀は自から二十世紀的の摸型あり、何をかその摸型と云ふ時間を経済し最敏活に修學する者は是れなり、人生有限、時間てふ問題は常に吾人に伴ふ時間の尊ふ可き素より言を待たす『蓬萊宮中日月長』は文明の嫌語也、文明は時間をより貴重にす、文明なる時代に於ては凡ての人の敏活なるを要す、況んや「學を習ひ業を修むる」學生に於てをや。二十世紀は優長なと長袴の時代にあらず。吾人は諸君と共に吾が校風の意義を解釋し是を振作擁護せんとするもの也、今や吾人は新學年の劈頭に立つ未來を望めば邈乎たり、何事も誌れざる白紙は永遠に長しア、此の白紙！吾人は如何なることをか誌さ

んとする、冀くば豫言者の書に似て、殘す所僅少となるに隨ひ更に慕しくなる此の一學年を、滿校一致最も有益利用し、吾が校々風に新生面を開かむかな。

○新入生諸君を迎ふ

嗚呼俊秀にして幸福なる新同胞諸君よ、試に諸君が嘗て村校に袖を列ねて顔に習字せし時代の竹馬の友を思ひ見よ、はた燃ゆるが如き青春の希望を胸に抱きて螢雪の苦を共にせし中學時代の同輩を思ひ見よ、諸君が今非凡なる學識と父兄の充分なる學資の援により専心研學に身を委ねつ、あるほどの幸福を享有せる者、果して諸君が嘗ての同輩中に幾人ぞ、彼等か多くは糊口の苛酷なる鞭に追はれて、可惜秀才の資をして無智の農商の群に葬むり了わらしめんとするにあらずや、然るに諸君は幾多の障礙を排して今や登龍門の第一階段に入るを得たり諸君の幸福や大なり、諸君の得意や思ふべし、而して又斯の如き俊秀にして幸福なる新同胞を迎へ得たる

我等の得意も亦決して諸君のうれに劣らざるなり。

されば吾人は茲に新同胞諸君を迎ふると共に聊か希望を述ぶる所あらんとす、許さる可きか、堂々たる男子の一身を月額僅に百金以上にあらずんば賣らずと同盟せる新醫學士、會社長の前に、風に揺らる、薄の穂のゆらくと叩頭して給金の高騰にのみ頭腦を痛むる滔々たる、工學士、説を狂げ節を屈して權威の前に瞠若たる文學士、はた收賄に不惜有爲の資を無爲に終らしむる法學士等の如きは決して諸君の理想にあらざるなり、諸君の終極點にあらざるなり、否な少くとも此等弊風の巢窟たる社會に立ちて螻の子等を一掃するの義務を有せり、嗚呼社會の改造は常に青年の熱血に待たざる可からず、諸君の責任も亦輕からざるなり。斯の如く重且つ大なる責任を負ひて未來に於ける活動の基礎を強固にせんが爲に我校に入學し來れる諸君の理想や高遠にして、又た其の抱負や大なるは今茲に説く

を要せずして明々々たり、然も敢て諸君の前に蕪辭を呈せんとするは止むを得ざる所以の存すればなり。

諸君は初めて熊本之地を蹈む以前、曾て我校の學風を想像せしならん、質朴を以て優り、禮讓を以て秀で、武を以て天下に鳴り優に日本の學界に霸を稱するに足るべしと、夫れ然り、豈うれ然らんや、こは既に業に過去の渦中に葬り了られたる一場の夢に過ぎざるなり、因循、懦弱の波は滔々として白河の岸を洗ひ、淫靡の風は颯々として龍田山の松に狂ふ、是れ現今の狀態なり、我等の先輩が曾て口を極めて罵りし京坂地方の氣風を今尚ほ罵るの勇氣ありや、否な罵り得るの鐵面皮を有せりや、聞く所によれば我習學寮の或一部分には猜疑の暗潮滔々として流れ豺狼の群頻に牙を鳴らし、爪を磨ぎつ、ありと、果して眞か、若し道路説く所をして眞ならしめば諸君の不幸何ぞ之にすぎん、嗚呼斯くの如くにして何ぞ社會の廓清を叫ぶの權利あらんや

、濁浪澎湃として流れ去り流れ来る暗黒世界を改革すべき任務を帯べる青年にして既に斯の如し、眼前の小野心にかられて黨を與み、蘇張の權謀術策を試みんとす 嗚呼何ぞ其心の卑劣なる、何ぞ斯く其心術のさもしき、其他云ふに忍びざる事情が平和の假面の下に隠れつゝ、ありと、若し夫れ斯の如くんば吾人は殆んど云ふ所を知らざるなり、嗚呼今尙ほ龍南の氣風盛なるものありと喋々するものあらば吾人は實に啞然たらざるを得ず。諸君よ、端なくも言少しく激に過ぎたり、然れども之を以て單に奇矯の言となすなかれ、龍南の氣風衰へて振はざると玆に數年、生徒の破廉耻なる行動は雨後の筍の如く續々として起り、起るに隨て規則、宣誓の類も亦生じ來りて底止をする所を知らず、悲しい哉 若し斯の如くにして進まば終に鏈を以て其肉体を束縛するに至るやも計り知る可からざるなり、嗚呼反省一番せざる可けんや。

諸君は入學するに際し衆人の前に禁酒を盟ひ、

規則に違反せざらん事を公言しぬ、若し斯の如くにして尙ほ誓を破らんとするは是れ勿論諸君の良心の許さざる所にして、又吾人は切に其宣誓をして全き功力を保たしめんとを望む者なり。嚴肅なる式場の中央に其誓文がいとおごろかに讀みあげられたる時、吾は暗涙の眼底に動くを覺ぬ、嗚呼斯く迄に學生の良心は遲鈍になり終りたるか、斯く迄に墮落し終りたるか、宣誓によらずんば終に學生の自分を守り得ざるか、何ぞ情なきの甚しきや、更に考一考すれば、此等の罪は皆一二年の長を以て諸君に先輩たる吾等に歸せざる可からず、吾等の行動は終に此宣誓を生み出したればなり、嗚呼吾人は何等の言を以て諸君の前に罪を謝すべきか、

諸君よ、龍南の氣風衰へたるを既に斯の如し、幸に高潔なる心を以て一新風の建立に従事せよ、宣誓は到底宣誓以上の價值を有せざるなり、獨立の精神を發揮せよ、自重せよ、然らずんば宣誓に對する服従も三文の價值なきなり、諸君

よ、吾人が諸君に向つて切望する所は只先輩の惡風に満てる習慣を打破して光明ある新學風の建立にあり、諸君幸に吾人が意のある所を察せよ、

○入學式

九月十二日午前九時より、入學式を雨天体操場に舉行せらる。舊生徒は場の左方北面して整列し、新入生徒は之に對し南面して立つ。職員東壇の左右に列して場茲に成る。定刻、櫻井校長は悠揚たる態度靜に場の中央に進みて、本日入學式を舉行するとを誥ぐ。此に於て新入生徒總代は進みて宣誓文を朗讀す。校長則ち新入生徒に對して、滔々數千言切々懇々として訓諭せらる、所あり。次で新入生總代として、工學部及び大學豫科より各一人、舊生徒に對する挨拶を述べ、舊生徒よりは、藤堂總務委員出で、新入生に對する挨拶と希望を縷述し、終りて前學年間無欠席者の勤學を表彰せられ、次で本學年間

に於ける特待生選定式ありて閉場す。時正に午前十一時。

宣 誓 書

一 校規並ニ示達ヲ確守シ師長ノ訓諭ヲ服膺スル事

一 苟モ學校ノ體面ヲ汚スカ如キ行爲ヲナサル事

一 猥ニ退學ヲナサル事

一 在學中ハ決シテ飲酒セザル事

生徒等謹ミテ右ノ條項ヲ遵守シ決シテ違背セザランコト誓

フ由リテ茲ニ姓名ヲ自記ス

九月拾二日

○新學年に於ける弓術部概況

一 葉落ちて天下の秋を報じ、吾人は茲に希望に満ちたる新學年を迎ふるととなつた、此時に當つたて我弓術部の概況はどうであらうか、吾人は今須次序を追うて是を述べんとするのである。

○新部員募集、每學年の始めに當つて部員の募集に應ずる人は随分多いが、中途で止めてしまふ人も極めて多い、先づ最初に五十人の入部者があつた者とすれば、仕舞までやり續ける人

は、常に其十分の一、即ち五人位になるといふ有様である、吾人は、斯の如き薄志弱行の人を稱して三日坊主と名づけたのである。是は實に概嘆すべき現象で、吾人が委員の任についてから、常に苦慮して其が抑制の方法を講じたのであつた。其方法といふのは別でもない、第一に公園あたりの矢場で、なくさみ半分にやる様なそんな生半可の氣でやらうといふ人は、半端から跳ね付けて、極熱心の人をのみねて、共に其技を磨き其妙を探りたいのであつた、そこで吾人は募集の文にも「三日坊主の多からんよりは、熱誠忠實の士の少なからんことを望む」といふ少しく角のある嚴然としたところを揭示したのであつた。そして吾人は竊かに應募の士の少ないことを心配したのであつた。然るに其結果は全く夫と反對で、無慮も七十余名の多きに登つた、吾人は實に其數の多きに驚き、且は熱誠忠實の士をかく迄も多く得たのを思ふて、欽喜の至りに堪へなかつたのである。感謝す新來七十の部

員よ今や我部は新舊部員合して百有二十名に垂んとするの一大膨脹を來たしたのである、過去の歴史未だ其例を見ざる一大飛躍を試みたのである、此の膨脹此の飛躍を永久に保たんとするのは實に諸君の責任である。

○部員の級別 從來我弓術部に於ては部員の熱心を奮起せしめ且つ又部内の秩序を保つべき大要素たる階級といふことについて全く欠けて居つたのである。だから、少しも自分の位置階級に對する責任と云ふものがなかつた、從て例會に出る人も少なくなり、部に對する感情も疎くなるといふ様な始末で、益熱心家が少なくなるのである。弓は素、當てるものであるのには違ひないが、いくら當ても其体の出來て居らぬものは所謂公園流、矢場流で精神の涵養を主とする武術の本意に背き、從て却て識者の笑を買ふものである、夫れは兎も角、部の内に階級の無いのは右の弊害が有ると云ふことを茲に看破したので、吾人は斷然師範に乞うて一々其人たつ

いて階級を付けて頂いたのである。其結果は即ち次の様である。

二級

稻川牛五郎。野村貞。矢野漸。鴻巣盛廣。岡本松喜

三級

澤友彦。山元喜二。永山在徳。

四級

二階堂行敏。竹中鏑三。黒川健士。

五級

大谷彬亮。緒方猪之吉。柳三郎。原清明。不破一氣。

西岡達郎。野原肇夫。林常夫。森 誠。

六級

花田大五郎。平林兼雄。工藤儀作。西村事代。江口元太郎

八尋伊三。小中恒行。相馬種丸。松見辰一郎。淡輪熊一

値賀龍夫。

是は皆舊部員のみに付いてであるが、此間の射台式に出席した新部員の内で、

有田正次郎。高木清。加藤健一。益貞貞三

の四氏は五級へ編入せられた、此階級は素より其人の技倆の進歩と共に昇級するので、又例へ技倆はあつても、例會に出席の少ない人は、自

然と昇級が遅いこと、なる。新舊の部員願くは奮勵し給へ。

○新部員への注意。始めて弓をやる人は、多く皆當てるとにはかり心を用ゐて、大切な体配を等閑にする人か多いからいけないそれでいきなり的に向ふよりも、先第一に辛抱して巻藁を引いて、先輩の人の指導に従て其体を作ることを務めねばならない。体も定まらないで、的に當つても所謂まぐを當りで何にもならない、すぐ其當りは無くなつてしまふのである。まづ兎も角も巻藁を引き給へ。猶言ふべきは禮儀といふ事である、かの道場にも、萬世無易の我部の憲法として部員心得といふものを貼り付けたが、其第一に「弓術は禮によつて起り禮によつて立つ」と書いて置いたが、實に其通りで、弓術といふ武術か禮といふことを取り去つたならば、殆どあとはゼロとなるので、所謂精神の涵養といふとも、禮を踏んで始めて行はれるのである諸君願くは之に注意し給へ。

○射始式。九月廿一日我部は茲に新學年の射初式を行つた、此日はあやにくにも各縣の茶話會などが澤山あつたので、新舊とも部員の出席の少なつたのは遺憾であつた。先づ最初、式始めとして稻川、野村、矢野、鴻巢の四氏の体配があつた。一進一退、嚴肅なる其様に皆々酔つたであらうか、滿場水を打つたかのように、一人として咳拂ひするものも無つた野村氏の四つ矢中ゝの手際であつた。それから金的に移つた、一寸八分のそれ、中々當りそうでもないが今日はどうしたものであつたが、山元、東師範、澤、鴻巢、竹中などいふ中が皆近矢を射て幾度も胸を冷やりとさせたばかりであつたが、遂に我部切つての豪の者、矢野氏の爲に眞中を射貫かれた、其のめざましさ拍手の音暫時は鳴も已まなかつた。

これも濟んだので次に大的(尺二)の競射となつた、談笑の裏十本を射盡して、その結果は、九分山元、八分東師範、七分岡本、澤。五分、野原、四

分稻川、鴻巢、永山、二階堂、林、三分野村、竹中、高木、二分木下教員、有田、加藤、といふ風となつたが、同分競争の結果、一等山元、二等東師範、三等岡本、四等澤、五等野原、六等林、七等二階堂、八等永山、九等稻川、十等鴻巢、十一等野村、十二等竹中、十三等高木、十四等有田、十五等木下教員といふ様に定まつた當時日の出の若武者山元の喜二の九分は、中々すばらしいものであつた。

是から源平競射をやつた、負組は射場這ひ勝組は菓子の賞與といふ事に定めたのであつたが、二度とも上組の勝となつて年老ひ給ひし師範の射場這はれし、中々の滑稽であつた。是にて式も終はり各自解散した、今日はたろろしき程であつた昨日の雨の、名残もなく晴れ渡つた空に、うららかな秋の日が輝いて、よくよく風が絶えずあたりの松に音づるものが常に弦の音に和して、誠に心地よい日であつた。是によつて小するならば實に我弓術部今學年の幸は明らかなり。

ちろ願くは然れ！。

(こゝも、投)

○演說會概況

九月二十七日、本學年初期の演說會は、瑞邦館裡に開かれたり。今や幾多の健兒は、彬彬たる材質を抱いて、新たに入を來たり、一道の佳氣己に龍南の天に搖曳するものあり、本部の氣餒亦揚らざるを得ひや。果然、時辰器定刻を報するや、聽衆已でに堂に半バす。また前日の秋風落日胡馬獨り嘶くの觀にあらず。

遠山部長、先づ立ちて開會を報じ、新入會員諸氏に對する歡迎の辭と希望とを陳べ、茲に愈、豫想上龍騰飛躍の壯觀は現せられむとす。雜報子今まや管城に據て、此の快事を叙せむとす。而して先づ一言すべきものあり。何ぞや。曰く、本會の趣旨たる、初めより大演說を豫想するにあらず、唯會員が眞面目に其辨舌を練習すれば足るのみ、然らば則ち一演說を捉へて縱横

之を非難せむか、或は誠に酷に失するの譏あらむ。然かも雜報子は素より粗笨不羈の人、筆端の走る所或は甚しき極端に出で、爲に辨者及び讀者に對して罪を負ふこと少なしとせず、深く之を耻づ、而してなほ拳々の思情止むべからざるものあり、聊か以て其の概況を識すに資し、進で及ぶべくむば、聊か提撕の微功を分つを得ば、望茲に足るのみ矣。

第一席或る物なる演題を掲げて顯はれたるは、一部二年永山喜之助氏なり。題意已に奇なり、説く所豈奇ならざるを得ひや、知らず、辨士の唇頭迸出するものは、雲か、霧か、將た吳か、越か、聽衆等しく耳を聳つ、將にこれ強弩一發漢山を駭かさんとするの時氏は徐ろに口を開いて曰く。余が所謂或る物とは、何か或る事に付きて演せんとせしのみと、知得たり、君が所謂或る物とは演題未定の意義なりきを。さりとては、君も亦人惡き仕方かな。數百の健兒をして、所謂君の或る物を摸稜せむと勉めし事幾日ぞ、腦力幾分消耗

の責は君當然之を負ふて可なり。演題已に未定なり、今や新題目は擧げられざるべからず、此に於てか君は、余は聊か人生の意義を解釋せむとて、説き出して曰く、蒸蒸たる衆民其數何ぞ限らむ然かも是等は個々盡く他に挺然たらむとの希望を有せり、此に於てか利己主義なるものは現はる、と弁論鋒一轉他愛は自愛の變化に外ならず、他を愛するは先づ自身が愛せられむ事を豫想するに因るならむと論じ、勢此の如きを以て利己主義は萬人通有の普遍性なり、唯だ小人は之を行ふに容易なる手段を選み、真正の紳士は難關を通じて之を得むとするの差あるのみと斷じ、再び説を爲して曰く、凡る團體あれば必らず競争あり、而して競争は利己主義に基因するのみ、利己主義あるが爲に、人は營々として其一生を働作せり、已に然り、然らば利己主義は大に之を歡迎すべき者にして、決して遠ざくべきにあらず、遠くべしとなす者は偽善者のみ、眞に之を遂行せしものは則ち道德家なり

と結びて降壇されたり。君も随分加藤博士にカブレたりと見め、然れども議論の正否を論するは余の意にあらず、兎に角、精細なる研究の結果、明亮なるエキスプレッションを得ば、本題の如きは甚だ、趣味あるものならむ、君の着眼大に宜ろしく、觀察亦た所々に奇警なるあるを認む。然かも君は素南地の産南地の語異にして大甚だ解するに苦しむ此れを以て君の語中の時々、晦澁缺々たるものありしは、敢て怪むに足らずと雖（併し）これも可及的改良せられたきものなり、已に此大論題を提けて立つ、必ずや聴衆をして己が論理を會得せしむる丈の用意を要するは必然なり、然れども君の演説言語以外所所に、論理の明瞭なるを欠く所ありしは大に惜むべし。要するに君が今夜の演説は、目するに成功を以てすべからず。然かも君の精神あり、何の日か其堂奥に達するの日なからざらむや、君勉強。第一回の辯士人已でに倦む、之に襲ぐもの縦横叱咤、宜しく倦雲を驅逐する底の俊才を要

す、知らず、第二席三部二年小川勇君は果して其人なるか。君は藝と笠なる演題を掲げて立てり。氏は開口一番説きて曰く、余が今や辯せむと欲する所のものは、今年夏期休暇に際し、孤筇漂然蓑と笠とを侶として、久留米より筑水を溯りて英彦山に登り、宇佐より日出に出て、歸國せし迄の旅行記を述べむとするのみ、また他奇あるにあらず、故に面白い人には面白からむが、面白からざる人には矢張面白からざるむと喝破し得たり前哲未發の語、此言小川イックロウと稱して、不磨の金言たるに足る孔子再び出づと難く、能く改むるなからむのみ、偉なる哉君の言、而して其行を問へば、遠く肥筑の平野に大江の洋洋たるを見、行きて靈山の崖鬼たるに攀づ、已に山川の形勝を盡し、而してこれを行るに、萍々たる孤影を以てす、必ずや神機の觸る、所あり、氣宇の發する所あらざるべからず、吾人耳を洗ふて切に之を聞かむ事を求む。然も吾人の希望は抛られたり、吾人が君の演説に由て得し

所のものはたゞ、過大なる而して殊更に構造されたる滑稽のみ。然り詼諧甚だ佳なり、雖衆をして己れの演説に對する興味と注意を失はしめざらしめんとするには、時々詼諧を用ふる最佳也而して宜しく自然的の流露にして、機警直に骨を刺すの鋭あらざるべからず、然かも是、畢竟、演説の方便にして目的にあらず苟も此裡の義理を解せざらんか、塗巷の講談師と何ぞ選せん、此に於てか疑ふ、君の演説は其主とする所、果して何にありしかを、吾人甚だ慊焉たらざるものあり。抑又勉めて至らざりしものか非歟か只末段蓑笠會設立の趣意は面白し、或は同志あらむ君勉めよ。第三席現今の所謂社會腐敗論と公其心なる演題を提げて起ちしは、一部三年中川吉郎君なり。氏は劈頭喝破して曰く、近來塗人相遇へば必ず社會腐敗を云ふ、然りと雖余の見る所を以てすれば、必ずしも此くの如く甚しからざるに似たりとて、當今の所謂腐敗論の起因たる、收賄、奢侈に就きて、世人が眞正のコン

ミッシヨンと收賄とを混同するものありと慨し、又奢侈は人文の進歩上當然の結果なり、奢侈を止めよと云ふは、文明の進歩を阻遏せよと云ふに外ならずと論じ、次に公共心に説き及ぼし、英國民の公共心に厚きとを説きて、我國人の此心に乏しきを慨し、進みて其養成の方法に論及して、曰く、公共心の欠乏は道德の觀念明かならざるに因る、故に先づ之を明にするを要すと結びて降壇されたり。辯舌甚だ爽朗ならず、語氣尙は勁健ならざるを恨みとすれども、議論の順序は曉然たるを得たり。唯其の可否に至りて、未だ一日にして陳ぶべからざるものあるを覺ゆ。此に至りて、生徒の壇に上るもの三、未だ吾人に對して萬丈の氣燄を吐きて其の涸渴を醫するものなし、竊に以て恨となす、雜報子慨嘆沈吟之を久うす、漸くにして首を擡ぐれば、清瘦六尺の偉漢は已に演題に立てり、問はずして知る。是中嶋師範なるを、師範は無刀流の名家、故山岡鍊舟先生の遺流を紹介して、稜々たる氣骨及ぶ

可らざる者あり、濯々たる高致誠に是、武士の儼影にして、斯道の精華なり、武者修業物語なる演題を掲げて壇に立たる巋たる其容貌謁たる其風采、滿場等しく聲を吞みて、其聲咳に接せむとす、正に是れ風雨將に至むとして、風樓に滿るの趣あり、師範は徐ろに口を開きて曰く我國武士の本領は彼の「山ゆかば」の歌に存すと喝破して先づ其立場を明にし、次て武者修業の起源歴史に就て縷述し、進て自己の經歷談に入りて其の七歳の時醫師、氏の、身躰の、羸弱なるを見て成長の見込なしと云ひしを憶り、自ら奮て大に武術を練習し以て彼の醫師の鼻柱をヒシギ呉れむと思ひ立ちしとを説き起し、順次其立身に就きて縷述せられたり、其貪寒身に迫るも神色自若として尚劍を抛たざりしが如き躍々たる面目、優に當代の薄志子をして愧死せしむるに足る、談話は進みて其死を三決せし事に及び臺灣征伐の際、班師甚早くして遂に其膂力を示すの機なかりしを悼み、或は丁丑の乱に血氣の迸發す

る所直に鹿兒嶋に趨らんとせしも縁の制する所となり、徒らに憑吊の涙を愁雲に托する所の如き、或は廿七八年戦争の際、慨然志を起して國家の急に赴かむとして而して納れられず、徒らに劍を杖て燕京の天を睥睨する所の如き、舌端血湧き肉躍り或紫氣倏として起り白雲忽として變幻が如く變幻出沒神韻殆むと絶むとする者あり。滿場鬨として聲なく、時々唯唯の聲漏るゝあるを聞くのみ。談話は愈進みて、其總武の野に竹刀を肩にして、豪嘯し至る所敵なきの狀等、轉た當年、長軀魁梧にして血氣滿滿當らば磐石も破らむづ師範の爽颯たる英姿を追想せしむるものあり。滿場浴として甚だ酔へるが如し。然も時辰器は猶豫なく、彼の歩武を進めて、思はぬ間に定刻とはなまり、此に於て甚だ惜むへしと雖、餘談は之を後日に譲らんとて降壇せられたり。拍手の聲一時は此廣堂も壞れん許の勢なりし。次で遠山部長は本日有終の美を濟さむが爲、徐に其歩を演壇に運べり。部長身久しく米國にあ

り、文明の眞髓を極め、彼地の事實に通曉すること甚だ炤なり、然り而して其辨舌たるや、盡く是れ、端而言喫而動一可以爲法則者誠に本部の御本尊たるに耻ぢず。新生徒皆其風采を想望して止まず、之に加ふに其演題たるや頃者兇手の謀計に落ちて、敢なくも其名譽ある誠實なる而して勇敢なる活動に終りを告げたる米國大統領マツキンレー氏なり。師嘗て彼の風采を實視し其演説を聴きしと三度、此人にして彼を論ずる其卓越なる所あるや明なり、誠に是驕驥に駕して、王良造父之が前後となるが如きもの、其快驅奔逸端倪すべからざるの狀、未だ聞かざるに已に聞けるが如し。師は先づマツキンレー氏の出處、立身の順序を縷述し、彼の政策を説明し、批評し、而して彼の本領は實にやるべき時に遣り、やる可ざる時にやらざる所にありと斷じ、進で其モンロー主義の破壊を論じて、是實に彼が圓滿なる常識の判斷に基きものにして、其世界文明に貢獻するや極めて多大なりと。極力之を

議し、進て其私生涯に入つて、彼の容貌を叙し、家庭を談じ、彼は寧ろ英雄と言はむよりも擴大せる君子と稱すべしと斷じ、尙ほ進て彼が圓滿なる常識は、必ずしも時代精神と同意すべからざることをあるを知れりと説く、又彼は宗教を真正に守れり、彼は確に據る所を有したりと呼び、以て彼が亞米利人として好箇の模範なるを説き、最後に語氣を沈めて其兇變に仆れたるを吊し、再び聲を上げて、彼死すとも彼の政策は亡びざるべし、彼此に於てか瞑するを得んと論結して降壇されたり。事實としては、珍らしきことのみにもあらざりしかど、柳楊頓挫其妙を極め或は將帥三軍を率ひて肅々河を踰ゆるが如き、或は叱咤一鞭急下して敵巢に迫るが如き、緩急首尾、常山の蛇も雷ならざるの狀、眞に傾聴に堪へたり。

此の如くにして初期の演說會は其幕を垂れたり。茶菓の響應例の如く、散會せしは正に十二時、嗚呼面白かつた。

○兒島舊雜誌部長を送る

兒島教授は一昨年十二月に黒本先生の郷里金澤に歸耕せられてよりその後を承けて吾が雜誌部の爲め大に盡瘁せられ先生獨特の剛健奇峭、霸氣横溢せる文章を以て吾が誌上に異彩を加へられたるは云はずもかな、先生が雜誌部の爲め裏面に於て抱かれたる苦心の如きは讀者諸君の知らざる所なるも委員等は深く先生の擁護に感泣する所ある也今や吾等の切望を却け辭任せらるる乃ち書して先生の功勞を吾が龍南紙上にとむ。

○高木新部長を迎ふ

先生は明治二十八年の交一度わが雜誌部に於て親しく執筆せられしことあり、旁以て先生のわが部に於ける實縁淺ざからざる也、因りて今度わが部長に推薦す、先生の辣腕健筆の如き殆んど贅言せずして可也。

○山田教授を送る

先生は備前の鴻儒方谷先生の義孫にして、松學

舎の俊才なり三十二年十月吾が校に來られ爾來二歳疊々教へて倦まれず今夏卒然官命により第七高等學校に赴任せらる吾等は愛惜の念切なるあるも令より百二都城の弟子は篤學の風に倣ふある可し先生薫くは加餐せられよ。

春季柔道勝負短評

吉岡(紅)弘岡(白)。共に是れ新進の士、稽古の日尙淺くして未だ氣と体と相伴ふ能はず、氣息奄々苦戰すること稍々久しかりしが、飛ぶやと見ゆし弘岡が大外刈にあへなく敵は斃されぬ渡邊弘岡弘岡前戰の疲色もなく、縦横術を盡して攻立てしも、渡邊は大兵肥滿なれば、其防禦弘岡の鋒先を制するに足りしも遂に弘岡の腰投は見ごと功を奏しぬ、

小川弘岡。小川は此道に入る日淺しとは云へ、寒稽古以來の技倆見るべく、元氣斗牛を衝くの概あり、先づ敵の心を制して巧に其虚を窺へ、弘岡も技巧の士なれば勝手の大外刈を以て能く防ぎ戦ひしも、遂に敵に押し倒され、袈裟固に

て敗を取る。乞ふ敗をたりとも奮勵一番せよ、君の大外刈の功名は期して待つべきのみ、小川吉川。吉川体格に於ては一籌を輸する所あるも、油斷されぬ秘術を藏するもの、縦横翻敵之が爲に眩惑せむとす、されど遂に腰投一本敵首を取りし小川の功は、金風條來枯葉を驅るの類か、吉川の宿運や悲むべしと雖、敗を取りて氣を屈するは男子にあらず、乞ふ吉川幸に勉旃せよ、

小川山隈。山隈は此道に熱心なるを以て名あり、其体格小川と互格し其態度孰れも強頑鐵脚を以て相突衝する様は軍雞の技に似たり、改守進退度に適ひしも、小川の袈裟固に空しく破られたるは、山隈の爲に惜しむべきことなり、敗られむざらとすれば、用意堅に過ぎて自己の妙技を盡す能はず、鑑むべきことなり。

内藤小川。内藤は龍蟠鳳翔兼備の士なれば小川とは好箇の取組なり、小川は連戰連勝氣大に昂り、努力奮闘遺憾なしと雖新手の英芒には遂

に氣を奪はれけむ、大外刈の計に陥り脆くも豎子の名を成さしめぬ、小川は慥に本部の麒麟兒たるに足る至囑く、

内藤―錦織。始めは形勢互格の間にありしが、錦織は体少しく小さく力量も一步を敵に譲れば、漸々氣弛み遂に刀折矢盡の不運、絞を受けて錦織の息はつきぬ、噫残念、

内藤―緒方。緒方は筋骨稜々仁王の如くなれば体格はほ相若く、何れ劣らぬ大丈夫、一度奮然として飛騰すれば、怒牛の相打扞する如く押曳、暫時わたり合ひしが、好機を見出しけむ緒方は背負投にて敵を大地に投げ打ちぬ、内藤は前途有望の士頑張る所なく術の妙なる所を修めよ、永山―緒方。永山は体ころ小柄なれ、閃電闇を射るが如く、神妙の術を盡して折衝頗る努む、されど鬼をあさむく仁王の大力に無残や組伏せられて敗を取りぬ、乞ふ永山此れを以て奮發の鞭となせ、

竹中―緒方。竹中は劍客にして力士なり、体格

緒方と伯仲の間にあり、しばしが間は腕力にまかせて探み合ひしが、遂に竹中の巴投は見事功を奏しぬ、

竹中―原富。原富日頃の修練とて少しもなく、今日か始めての演武一花咲かせむと氣頗る昂る、竹中稍やおじたる景色見ゆしが遂に敵の足拂にて敗られぬ。

津江―原富。津江は講道館、原富は本校、知らず對外仕合一番の軍扇は何れに揚がらむとする、始めは形勢何れとも知れざりしが原富の形勢は時と共に弛み行き、遂には押し倒されて絞を受け息はつきぬ、誠に以て残念至極、

津江―中村。中村体こそ敵に劣れども寸進月歩の若武者にして熱汗を流して交戦する様は翩々たる胡蝶の如く、其腰を少しく振ると見るじが、奇麗なる體落は津江をして軍門に下らしめぬ、感嘆の外なし、

今村―中村。今村は講道館共に腕き、の小武者、飛鳥と競ふ敏捷は簪翠を逢ふにさも似たり、

中村先發腰投を試む、敵大に激し勝に乗る中村の力を利し出足拂にて斃しぬ、

合村ト草野。草野は本部の驍騎、合村とは好箇の仕合なり、合村は前戦の疲勞をものともせず又もや大外刈を以て見事敵を斃しぬ、草野も敗を取りしは君の弱きにあらす、術を練るの日淺かりしな益々勉める所あり、

合村ト久木山。久木山は輕妙自在の技を有するもの、起倒轉々意のまゝにかけ廻り攻めよする勢誠に凄まじかりしが、さすかは合村氏、暫くの間力を貯へ好機を待ちて遂に巴投を以て勝を收めしは感服の外なかりき、
合村ト大西。大西は肥肉隆々大春曰の如く、力量これに適ひ満身の精を盡して挑戦すること久じかりしが、大西過つて倒る、處を合村はすかさず敵の胸板に押しかかりて、縦四方に固めれば剛強の大西も再び飛び起る勇なく、兼て貯へたる豪力も施すに所なかりき、
合村ト本山。本山は体小なれど寢術を以て奏功

の道とするものなれば、數度の戦に四肢の働きにぶりたる合村の苦戰察すべきなり、本山は之れに乗じて莽りに攻め、合村は長く守りたれど遂に敢なき最後を遂げぬ、

本山ト村松。本山は寢術に妙を得たる人、村松体格小なりと雖も亦好箇の術士、二三度揉み合ひしが村松の小外刈にて刈り斃されたる本山、無念の程知られける、

村松ト萩尾。萩尾は戰友の死を吊はんと、息卷き切て躍り出で手業にて投げんか足業にて斃さんかど機を見て敵を苦しめけるが、内股にて敵を倒したるは見榮にありし、
萩尾ト松田。松田体格堅固、進止自由の勇士なれど、萩尾氏の自護躰に施す處なく或は寢或は起き、兩軍互に汗を握りしが拂腰にて萩尾を薙ぎ倒したるは凄しと云ふべし、
松田ト福田。松田益元氣を振ひ、連け打にも拂腰に敵を破りし手練の程感心、
濱田ト松田。濱田敵の特意は拂腰にあると早く

も察しげん、良く防ぎ戦ひしに俄然疊に聲あり、濱田氏の輕妙なる小嵐に敵は倒れたり、

濱田―福田。控へ居たる福田、物々敷敵の振舞哉と跳掛りて揉み合ひしが、濱田の大外刈に斃されたり。

濱田―田代。濱田連戦連勝形勢に據りて膽北斗を衝くの概あり、然かも田代の方や優りけんすくひ投にて倒れたり、而し小嵐大外刈にて二人迄斃せし効は没すべからず、

田代―榎谷。榎谷は永く稽古着を膚にせざりしと雖も、猶能く當年の英氣を振ひて田代を倒せしは見事の勝負なりし、

榎谷―池邊。初め池邊六分の勝を得たり、それより一上一下挑み合ひしが、入道殿の股絞も効なし、遂に池邊の大腰きまつて勝となる、

池邊―竹田。竹田快男子は出でぬ、しかも池邊の袈裟固めに斃れんとして漸く引分となる、

江崎―眞鍋。江崎は當校柔道熱心の士、眞鍋は講道館有数の猛士、初めより兩虎の相睨睨せる

が如く對立せしが、遂に引分となる、森―前原。共に筋肉逞くして適恰の相手と見えしが、僅が一分卅秒にて前原は斃れたり、森元

來斯道の修養淺からずとさく勉旃、

丸田―森。是を見て白軍の仁王様丸田はこれ無禮奴鬚むしり呉れんと、鋏腕振ふ勢はどても當る可くもあらず、其大外刈は忽ち効を奏しぬ、佐藤―丸田。見るまに佐藤は直前邁往、仁王様の鋏腕を捕わしか、仁王殿何小癪と二分時にして大外刈にかけ倒しぬ、

丸田―鈴木。白軍少しく色めきかけしが、紅軍鈴木 of 憤懣は遂に体落となりて丸田氏を倒しぬ入江―鈴木。白軍の入江、容貌魁偉背を裂ひて勇進し來ると見る間に、鈴木は床上横臥の人となりたり、其の皆負投にかゝれるなり、

入江―竹木。竹木いさ我軍の辱雪き呉れんと、息捲き切りて戦ひしも、寧ろ蟻螂の斧にして入江の大腰見事見事、

徳永―入江。体格酷似したりしも、入江の力

優りけん其技や勝れけん、徳永脊背投に陥る、
入江―木下。入江は獅子奮進の勢を以て木下を
体落にて陥れぬ、

入江―檜木野。一進一退其盡くるを知らず、終
に禮儀より交綏せしどやさしかりける

仁保―中光。六十秒立たずに仁保敵の出足拂に
かゝりて斃されぬ、

林―中光。兩氏共熊本講道館に驍名を博せし巧
手にして、又等しく足拂を以て鳴る、虚を以て
虚を衝き實を以て實に當るものろの苦心知る可
きなり中光數度の足拂六分の功ありて、林最後
の出足拂に十分の勝ありしは是非もなし、

林―野村。林は中光を破りて脱兎の勢を以て突
進しぬ、野村は新進の士、得意の腰投、旭日の
勢を以て瑞邦館裡其人ありと知られたる驍將な
り、互ひに一往一來秘術を盡し、虚々實實火花
を散し發しては雲となす、集つては霧となり、
神變奇轉觀客をして覺ぬ手に汗をせしめしが
、遂に決せず引分の命は下りぬ、

寺島―岐部。寺嶋は修猷館出身の英士にして、岐
部は熊本中學老功の豪士なり、寺島の骨格雄大
なる、岐部の鐵骨嶷出たる、何れ劣らぬ好敵手な
り、寺島氏の突撃は七分の功ありて敵の肝を消
したりき、岐部暫しは堅固に守り防ぎしが如何
なる隙やありけむ、敵の突き来る力を利用し横
捨身を以て見事功を奏しぬ、

岐部―中野。中野は福陵の勇士にして、勝負に
巧練なるは萬人の舌を卷く所。敵と向へば沈毅
にして能く敵を制する風姿、本道に志すもの、
師とすべき所なり、先づ立ち上るや最得意の左
腰車は岐部の胴體を風車の如くに翻へし、敵も
味方も數時は拍手を止め得ざりき、

中野―中村。中野は敵將を風靡し、雷の如き喝
采に送られて、得意の様は眉宇の間に溢れ勇氣
日頃に百倍せり、敵手中村は夙に瑞邦館裡其人
ありと知られたる小天狗にして、其動作の機敏
なる其姿體の飄飄なる、共に是れ巧技の好取組
、激搏奮闘互に秘術を盡せしが時は進みて引分

の宣告は下りぬ、

高橋——熊澤。高橋は伊豫松山の勇士此度故ありて熊本講道館に來り一時に高名し、本日本校に招待する事となりしなり、其体格技倆熊澤氏との好敵手なり、揉合ふ事暫時、熊澤氏の引掛けも功なくして体落の禍に罹りしは残念なりき高橋——社家間。社家間福陵の名士肥頗便々吾校の梅が谷なり、勝ち誇れる高橋の撥ね腰に無殘と挫かれしは残念なり、

高橋——池田。高橋は強敵を物の無事に斃して突撃猛進直に白の大將池田が中堅に乗打てり、池田今や盡く其部下を失ひ、而して敵にはなほ副將田代將軍神江なる猛將を残せり、英雄刀折矢尽の慘狀哀むに堪へたり、兩雄立上るや池田は大力を振ふて振倒し組伏せむとすれど、敵は忽ち飛起きて暫時揉合ひしが大外刈にて池田の勝ち白軍をして暫らく汗を拭はしめたりき、

田代——池田。是れ本日勝負之精粹なり、池田は小結を破りしも未だ關協と大關の三難關を叩へ

たり、田代は身体池田に比して餘程輸する所あれど、多年熊本中學にて鍛ひ上たる腕前は侮り難く見へたりき、兩雄渡り合ふ事多時一虛一實、秘術を盡し力を惜まざる組みては分れ分れては立ち、雲を吐き霧を蒸す蛟龍の首尾相應搏するが如く猛虎の咆吼馳突するが如し、兩肢反撥合して倒る、時は天柱碎け地維摧け、殺氣人を襲ひ、滿身の汗冷ゆるを覺ゆるの奇觀なり、桃戰四十分、大將の疲勞と共に白軍の狼狽は増來りぬ、俄然天上の一聲は觀者の汗を止めぬ、審判官は五分の休憩を約して、兩士各分れ去りぬ、五分時の休憩に兩雄の氣息は恢復されぬ、再び獅子奮迅の勢を以て衝突したり、敵は大將の背負を掛くるに丈け低く、彼は大將に得意を打つに力足らず、孫吳の策六蹈の畧も遂に施すに由なく、又數十分を過ぎて勝負決せず、兩雄異日を約して相分る、鳴白將軍遂に負を取らずして、一時間に渡れる苦闘は白部下の大ひに多とする所なり、然れども將軍に望む所は此偉大なる

骨格に加ふるに、虎吼風生の巧技を加へられんことなり、將軍夫れ自愛せよ、

是にて本日の紅白勝負は終りを告げぬ、然れども残念なるは紅軍の大將神江氏なり、氏は熊本中學の驍將、本日は態々招待して待つに大將の禮を以てし、天晴れの枝量を拜見せん筈なりしに、前述の有様となりぬ、是に於て審判官は高橋氏を以て番外御好の三本勝負を命じぬ、されば兩雄互ひに揖禮して立向ひぬ、一は數名の部下を引卒して來りたる中學の精粹、紅軍の大將なり、一は龍南の野に潜に功を收めむとする氣鋭の士、互ひに負け劣らじと氣を揉み体をいらいちしが、いかなる隙やありけむ神江氏は敵がかくる揆ぬ腰得たりと抱き占め見事に首をぞしめたりける、高橋氏は奮勵一番足拂ひを行ひしも機微遂に逸して見事神江氏に裏をはたされけるこそ遺憾なれ

「委員投」

吊亡友飯田繁一君

死は人生の一大慘事なり、況んや前途有爲の青年に於てをや、況んやその人の短生活は殆んど所謂人生の辛酸を以て充たされ未だ一陽復來、人生の快味を知らざるに於てをや、吾が亡友飯田繁一君の死是也、君は明治十一年豊後別府に生る、本姓矢田氏、後出て、飯田氏に養はる、二十六年君笈を負ふて大分中學校に來るや、學識雋秀、一時儕輩を壓し、人皆君の前途に囑望す、余の君を識りし實に此の時にあり、後君將に中學を出てんとするに際し重症に罹かり平生の志殆んど空からんとす、幸にして健康恢復し、再び宿志を遂げんとして三十二年本校に來り三部に入る、常に健康体育に注意し、從容回翔、隱に大成を期するもの、如くなりき、而かも天なるかな、命なるかな、君は再び病魔の襲ふ所となれり、時維昨年十二月也。人生一に何ぞ蹉跎の多き、君の病勢危殆となり熊本縣立病院に入るや、君の養尊父來らる、歳は暮れんとし春

は來らんとして、君の病勢依然、加之學友多く歸郷し、君の病室漸く寂寞、君は已に再び立たざるを知り、痛嘆措かず、父君涙を隠し笑を湛へ、三才の兒を遇するが如し偶々余此の地に淹留せるを以て、瀧川君と共に君を病室に訪ひ、常に這般の狀況を目覩し、帳然として同情の念禁する能はざりき、已にして、君の父君は病兒を後にし憂心を貽して歸省せられぬ、蓋し時歳末に近かく父君は醫を業とせるを以て也、父君の歸らんとするや瀧川を別室に招き金若干を出し涙を飲みて後事を托す、瀧川亦黯然たり、年改まれる後、若干日、君の實尊父は、最愛の兒を異郷の鬼とするを恨み、如何にしても故郷に連れ歸らんとて來られぬ、或は、その烈寒、その長途、君の疲体の堪へ得ざらむことを疑へり、而かも父君は斷然病兒を携へて歸らむとせり、雪ふる朝、風寒ひき曉、垂死の病友は、池田より乗車せり憐れる語調、衰へたる容貌、これ永遠の紀念なりき、本誌八十四號に誌せる瀧川君

の「大雪小雪」は實に此の紀念とす可き朝の記事なり、途中無障、北海道郡市村の養家に歸る、錦繡をこころ飾らめど期せる故山男子豈に不治の重患を得て入るに忍ひんや、後七ヶ月を経て、今夏八月十六日溘焉として逝く。君丰容華暢、俊秀の氣眉宇の間に露はる、君の尙縣立病院に臥せるとき余に云つて曰く「その容貌を觀ればその人ど爲り殆んど察す可し」と移して以てこれ君を讚す可し、君頭腦明哲思慮周密、殆んど老成の風あり、加ふるに、堂々物に屈せざる男子らしき氣象あり、大に君の性格を高うせり、君また文藻に長じ、その文、流麗暢達、琅々誦す可し、嗚呼、君逝きて南豐の一才を失ふ

(晚川)

吊村上爲夫君之死

同窓各故郷の胸に抱かれて、皆家庭の快樂に酔ふ時、端なくも、一の哀しき音信は傳へられぬ。何ぞや。二部三年村上爲夫君の長逝是なり。七

旬の前、君が壯健なる容姿と、愉快なる談話とを、心裏に印して、共に手を分ちたる吾人は、君が音容、今猶ほ生けるが如く、眼前に髣髴たるを覺えて、轉た君が他界の人たるかを疑はずんばあらず。君は猶ほ此世に？、蕭颯たる君が墓畔の秋風は、頻りに空に唄いて、微かに「否」と答ふ。

昨日見し人は何處と今日とへば

谷吹く嵐峯の松風

此を思ひ、彼を想うて、吾人は、吊憑の涙坐るに兩頬を傳ふを禁すること能はざるなり。

君は熊本の人、家は手取に在り、三十二年尋常中學濟濟疊を卒業して、本校農科に入り、爾來孜々として日夜怠らず、奮つて一臂の力を邦家に盡さんことを期しが、今夏七月下旬、脚氣を病んで療養怠りなかりしも、中途室扶斯の偶發に遇ひ、醫藥終に其の効なく、八月二十五日、空しく志を抱いて幽冥の裡に入りたるなり。君は性快活にして、談話極めて圓轉滑脫、其の

面には絶えぬ愉快と和平の色輝き、其の心には曾て憂愁の宿るを許さざりき。思ふに、君が遊魂、今や永遠の和平に入りて、靜かに甘き眠を貪りつゝあらん、例へ末期の其の際みには、離愁現在未來の間に纏綿して、之を斷つには、幾多の苦痛と怨恨とを感じたりしにせよ。

君又甚だ運動を好み、近郊の山川、到る處君が足跡を印せざるなく、テニスに、ボートに、フットボールに、弓術に、君が快活なる姿を眼にせざることを殆ど一日もあらざりき。君は、確かに、人工を以て「時」の勢力に打ち勝たんと勉めたる者の一人なり。而かも、君が早世は、人をして命運のまた如何ともすべからざるを嘆せしむ。君早く父君を失ひ、家には母堂と二弟とあり。君の母堂に事ふるや極めて孝、時に薪水の勞を自らするを辭せず、隻手一家を提げて、片手君國に報いんと期せしが、惜しい哉、天年を假さず、一家を悲嘆の淵に残して、空しく他界の人たらしむ。母堂將に老いんとして二弟小なり、

吾人は杜染を失うたる君が家族の衷心を思つて、更に一掬の涙なきこと能はざるなり。

身を大塊の一片と觀して、生死を平等視するは、是れ哲學者の心地、個人を人類の一員として、我が死か人類大局の上に影響する所極めて小なるを笑ふは、是れ樂天家の安心、而かも、彼等の多くは、務めてかく思つて自ら慰むるに過ぎざるにあらずや。哀別離苦は人生の常、眼中一点の涙は玉の如き真情の發露なり。同窓千滴の涙にして、若し君が遺族の悲嘆を分ちて、其の双頻六點の涙を減するを得ば、吾人が君に對し又其の家族に對する吊憑の意は茲に其の大半を達したるなり

○東京便り

長程の汽車旅行、退屈の外何の得る處もなく、京都に一泊仕候、同地方の風俗は多少ゴールの九州人の目に立つ、所謂衣裳で倒れると云ふ姿、山までかふとを着て寝て居ると云はるゝ、極

々優長を寧ろ馬鹿らしい處に御坐候、殊に其の佞聲は撥音たかき生等の口調と相和せず多少不便を感じ申候、

夜行に乗ず、湖も臙に單調なる淋しい汽車旅行にて候びき、而し二人の海老茶袴の美しいのが僕の隣席で、しかも大變こんで居た爲に、時にハイカラを眞似て、席を譲て呉れたり、代つたりした事がなかつたならば、あはれ一層寂寞極る旅行なりし事と存候名古屋あたりより、夢中にて、目覺たのは夜明頃靜岡あたり、遙に富嶽を望みし心地、何ともはや申上げ難き候、

一等室には清國返りの近衛公を見受く、質素の夏服に、烏打帽子と云ふ出立、これが華族の親玉で貴族院の御大將とは、知らぬ者は受取れざる事と存候。

四日午前十一時新橋着、直様神田へ飛込み、水道の水にて製したる湯に浴し、連日の瓦斯に汚れたる身体を洗つて、ヤット元の小生と相成申候。

ある洋行歸りの準ハイカラーが、英國の小兒は生意氣でちやべく英語を話して居ると、知人に語つて大笑となつた話があるが、僕が始めて東京に来て先づ感じたのは『東京の小兒は生意氣でちやべくどさを使つて居る』である、笑はれるかも知れぬが有体に白狀すれば右の通りなので、

大學を見、上野を見、淺草を見、九段を見、丸の内を見、芝を見、家を見、人を見、善人を見たり、さまで残る所としては只東京と云ふ空漠な概念より外には得る所御坐無候、而し何事も大体でゐるのは感心だ、世の中の大小精粗善惡陰陽凡ての者を包含して尙餘りある所を示して居るのは流石に東京に候、其清濁満々たる中に上下して、應接縱横し、一練り練つたものでなくちや、日本の事を料理することは出来まいと思へ、赤門便にて有名なるあね生に逢ふ、破髻を撫して曰く、何んだ上野が熊本の下河原公園に比較されない僕の通信が間違つて居ると、ソナ事

では駄目だ、アレを下河原と觀する様でなくちや到底話すに足りない、今少し社會を吞む事を研究し給へ、と一番氣焔を吐きかけられ申候、久しく獨逸の辭書に離る何となく手持不沙汰の氣味、『かやつらぬ僅の手間の之の樂さ』とは此邊の消息なるべしと存候、これよりは外國語に食傷せる腦にドシ／＼苦味丁幾を送り可申候、〇〇先生を訪問したら宜敷云つて呉れ給へ、早く御出馬御上洛にならんと世の中は侵々として駿馬の如く御坐るて、申上げて呉れ給へ

(在京K生)

○學寮見聞

△大改革の真相。名づけて大改革と云ふ、或は大袈裟なるか知らざれども、兎に角、今度わが學寮には種々今迄通りでない事がある、先づ第一に舊寮の自習室を板壁で全く兩等分した、最も、此の事は餘程前々から計畫だけは有りたる由なれども、如何様、四五百兩の多額を要する

ことゝて、決行して果して利なるやも確知する能はざりし旁躊躇在苒したりしが、奥舎監は斷然之を決行した、而して又、今迄は學寮では、新入學生と舊生徒とは、同一の室に配布し、部も成る丈け取り混ぜ、縣も出来る丈入れ違へ、一室員を能ふ丈け綜緒せしめたりしが、此の學期よりは、新入生は新入生のみにし、加之一部生は一部生のみ、二部生は二部生のみと同室する様にし。各室に同部の上級生なる室長一名を置き、取締とし、又舊生徒の大部分は新寮に祭り込みたり、是れ表面上の事實なり。是れ等のことは、雜報子によりては筆の種になることなれば、先づ奥舎監を訪ふて事の真相を敲いた、所が舎監は例の理想論―教場は學生の智識、品性を陶冶するには充分ならず、是非とも學寮と相待たざる可からざる事、及び吾が學寮は已に名が示す如き、只學校の庭内にある沒趣味なる大下宿にあらすして、娛しき一大家庭なり、故に出来る丈け、心安を寮に生活し、學寮生活の

如何に興味ありて、如何に娛しきかを、自覺せしめんとす、由りて夫の繁文褥禮は、出来る丈略し、ヤレ何届何願とかは余より重視せず、要は唯各自の良心を啓發するに務む、換言すれば、勿れ主義を執らずして積極的に寮生の心得可く、行ふ可きことを指示するにあり、とを前置として、夫の自習室兩等分は寮生の勉強に都合よからむと思ひてなり、その理は、今迄退寮する者の口實は、多く寮の勉強に不適當なるにありければ、強ひて之を止むる能はず、爲に、學期の末に至れば寮内寥々各室二五五六の人影を止むるに至る不振の有様に立ち至る、よりて此度の如く兩分して、室も狭く人員も少なく小奇麗な室になりたれば、絶對的とは云はぬが、比較的勉強に都合ならむと信ず、又夫の新舊生隔離及び部分の如きはその利を確信せるに非らざるも、或は利ありて害の鮮なかりむことを豫想して、經驗的に決行せる也、即ち同部生にして一室にあれば、勉強上種々の打合せを爲すを得、大に便

利なる可くと思ひ且つ禁酒の一法ともなる可し
 とて新入生は盡く部によりて分かれて、舊生徒
 は新寮及び北寮の二個の室に入れあるが、是れ
 は敢て部によりて分けんと欲するに非らず、目
 下は、唯、便宜上、同部同室の有様となり居れ
 ども、是は混じても、差し支へなきなり。又夫
 の工學部生徒は、以前にも、工學部よりも大學豫
 科の生徒とは分離させ呉れとの申込なりし位に
 て、之を分離せるは至當と信ず、云々雜報子、
 聽下して聊か感ずる所無きにしも非らざるも、
 飛ばんとする筆を叩へて、他日根據を得て論す
 ることもある可し。

△九月二十六日の學寮會。これ新寮生規約實施
 以後始めての會なり、雜報子も亦新規約の定む
 る所によりろの一員たる資格を以て臨席せり。
 偶最も興味ある(余は故らに興味て語を撰ん)
 問題提出せられたり、即ち會長及副會長を廢し
 て各部より一名宛(一部は文、法、より各一名を)
 撰出する議案是なり、甲論乙駁、實に雜報子を

して、オ、然るか、と頗る興味を感ぜしめしが
 委員附托の説先づ破れ、遂に會長の賛否を起立
 に問ふや否とするもの十余名なりければ本案は
 大多數を以つて果決せられぬ蓋し勢也。オ、此
 の如き案の出づるに至れるは、元々會長制度に
 不賛成なるか、抑も亦、現在會長に快からざる
 が、將た亦、新室制に應せんとしたるか、之を
 研究するは豈興味ならずと云ふを得んや。而し
 て本案は奥舍監の折衷案と變して愈成立し五名
 の幹事も撰舉せられたり、學寮の一平民たる雜
 報子は、何んの彼のと、小言は吐き散らさざる
 可きも、只新任幹事諸君の辣腕により、學寮機
 關の敏活に、運轉されむことを切望す。

近況片々

◎題して近況片々と致し候は、必ずしも諸般景
 況の內的觀察を擅にして、こゝを筆にせんと
 にては無御座候。たゞ學校が其の物質的將た
 又精神的方面に經營したる所のものにして、

吾人の目睹せしものを列擧して、聊か他郷にある校友諸君が温故知新の料となし、兼ねてはまた當局者注意のある所を、一般諸君に報知したき許の思付に御座候。

◎校友諸君にして一度習學寮にありし方々は篤と御承知なるべし。彼の深緑——寧ろ暗鬱——なる色彩を以て、南北兩寮及び北寮と食堂との間に二列をなして繁り合ひ、阿蘇の峯より昇り來たる光り満ちたる旭暈の輝きも、龍田山の嵐翠吹き寄する清く冷しき朝風も、遮り止めて其の自然の恵に浴せしめざりし椎樹は、先きの日數多木こり共召されて盡く切り倒され候。これを前日に比すれば、誠に天空海濶、大空にはね打ちかわす飛鷹の數さへ指呼するに難からざる趣、如何にも心地すが／＼しき限りに御座候。將たまた兩寮樓上、窓に倚りて望めば互に見ね渡さる、ものから、そこらあたりの晏起先生が、しどけなき姿まなじりをすり／＼泣き出しそうにして窓より顔さ

し出さる、工合等、思はず吹き出す場合も不
少候。

◎これも御承知なる彼の雨天体操場——秋雨肅々袖をぬらす頃はひは、夜もすがら淙々（そうそう）の響きをなして、幾度か遊子の魂を驚かする亞鉛板張の雨天体操場——將たまた本校の盛典大式は盡く此處に舉行せらる、大事の式場なる雨天体操場——然かも其構造蕪雜にして見すばらしく、申すも畏きとながら、御聖影を奉置する場所としては、余りに恐れ多く感ぜられし彼の雨天体操場——も此度樂しき夏期休暇の夢さめて参り見れば、聖色燦然見違ふる如き出世を致し居候。四方は明り通し能き硝子窓にて圍まれ、下の板敷も盡く無釘の歩まば滑る如く麗しく造り變へられ候。日本有數の高等學府として、大講堂の欲如は遺憾の限りに候へども、これも亦國家經濟とやらの都合も有之由に御座候へば無致方、先づ／＼今回の改築を以て満足する所に御座候。

◎これも時々御經驗のときに候はんが、從來始業終業の時間と報せし、彼の長たらしき、力なき喇叭は各教場に響き渡らぬ限りありとて、今學期より鐘に改められ候然し是も以前より幾分の増しなれど、なほ新寮等には響き渡らぬとの苦情も、間々有之様聞及候へども、これは鐘の音の低きにや、將たまた御當人の耳が聞えぬのか、其の處迄は判斷の限りに無御座候。

◎奥舎監は毎週火曜日午後二時より八時迄、土曜日零時半より三時迄、新寮樓上應接室に詰めらる、事に相成候。これ申す迄もなく舎監が其親愛なる寮生と共に、互に胸の思ひを打開きて談し合ひ、將た又諸般の事に對する忠言をもし、自らも好んで寮生の意見を聞かんとこの志望により候。舎監の如きは誠に其職に忠なるものと申すべく、此の如くにして初めて學校教育の主眼たる精神的教育も實功を奏し申すべくと愚考仕候。蓋し教育者の務たる

徒らに尊大を装ひ理屈のみにて生徒を制馭せんとするは、到底戈を以て泰を春くの類、其結果も見ゆ透き候。何事も實踐躬行、多大の同情を以て生徒に臨むるにありと信し申候。舎監の如き蓋し此消息を知るのか。聞く所によれば校長も亦時々臨席さるべしと、吾人切に其實事となりて現はるゝとの一日も早からんことをのみ候。これにつけて吾人はまた寮生諸君に望むべき事有之候。うは何かとの御尋ねに候や。申すまでもなく、かく先生には熱心摯實に其誠を盡され、喜んで吾等の説を聞かんと切望さるゝに關らず、寮生よりは遠慮して言ひたきとも言はず、自ら腹ふくる、思ひをなし、舎監をして獨り樓上に充然たらしむる如きは、實に是舎監厚意の存する所に背くのみならず、また吾人寮生御互間の不利卷に御座候。今や言路は明々開かる、諸君は事の學寮に關し、將たまた學事に關するに關らず、耳聞目睹大小となく是を披瀝して

可なり、其の中心熱誠を以ての言に候はゞ、時と御目玉を頂くことをも披陳して差問ななかるべしと存申候。

◎其他室割の變更等も有之候ひしが、是は別項學寮見聞にて御承知下さるべく、先づはたゞ心に浮び筆の至るに任せて、書き記し候ものは是程に御座候。脱漏の箇所も候はゞ後日改めて御報知可申上候。早々。

○公德心と學寮生

人類といへる詞は、吾人をして自明的に直覺的に人類相互は深く相關係する事を覺らしむ。然り人類は常に個人的たるのみならず、同時に社會的動物なり。

見よ人類の祖先が樹の實を食うて生長し、彼等相互の關係を形成して、家族を形成し種族を形成し國民國家といへるものを形成したるにあらずや。家族といひ種族といひ、はた國民國家といふ、其範圍に於ては廣狹ありと雖も、其根本思想の内容に於ては等しく是れ社會的にあらず

や。果然人類は先天的に社會的動物なり、即ち社會的動物なり。

既に社會的動物なる以上は、吾人は社會に對する公德心なかる可からず。夫れ社會は有機体なり。その有機体をして完全に其有機体たる面目を保持せしめんと欲せば、是にその動機力なかる可からず。素より複雑なる社會なれば、此を眞正の有機体たらしむるは種々の要素な可からず。然れども如何に其の要素ありて完備整頓すと雖も、其大切な動機力なくんば社會なる有機体を向上的に進化發達せしむる事遂に得べからず。創世の社會は決して現今の開明社會となるべき理なし。然れども進化すべき能力を賦與せられたる人類社會は、幾多の先覺者たる人物の公德心によりて今日の開明社會を現出せり。果然吾か有機体活動進化の動機力は個人の公德心なり。見よキリストの人類に對する公德心は天地の活精神となりて、世界といへる有機體の活動力となり、こゝに世界文明的事業の勃

興となり、またなりつゝあるにあらすや。歐洲の文明は、世界の精神的開發は、果然キリストの公德心に由る。

社會は個人の集合体なり。社會は個人を離れてこれあるべからず。個人は社會組織の成分なり。そは宛ながら水に於ける酸素と水素との如し、今若しこの二個成分にして多少の故障及各自に不足あらんか、遂に水を生成するを能はざるべし。社會の組織せらるる全然斯の如きものにあらずとするも、社會が社會として完全なる發達及活動するに於て、之を形成する個人に於て公德心あるもの缺くる所あらんか、其社會國家はヨシ有形的に存在することあるも、精神的に於ては必然四分五裂し、遂に其の活動を停止して無能力なる有機体となるべし。見よ足利高氏一度皇室といへる主宰者に對して、信念なく道念なく、自己の慾心に驅られ、其慾心を果たさんとして立つや、天下は乱麻の如くなれり。而して其時代は活動なく、進歩なく滔々として腐敗

せりき。又ローマの滅亡、ユダヤ滅亡の跡を考ふれば、國家社會の保續進歩の動力たる各個人の公德心を沒却したるによること、是れ過去の政治が證明する所にあらすや。

其社會全体の個人が社會に對する公德心なき時は、其社會は活動なく、進歩なからしむるに至ると知らば、公德心は即ち有機体なる社會を有機体たらしむる動機力たること明白なり、其の動力なりと知りたるに於ては之か涵養をなさざる可からざるや、吾人の警言を要せず。

只だに社會に對してのみ公德心の必要あるのみならず、自己の人格品性に於て之の徳なくんば社會に義的活動をなすこと能はず、社會に貢獻すること更になく、實に人類といへる光榮を失墜するに至る。故に曰く公德心は社會と個人とれ自身とに大切なる要素なり、豈涵養せざる可けんや。

誤解する勿れ、公德と私徳とは別物なりと。其文字こそ異なれ、公德と私徳とは相離るべきも

者にあらず。私徳の人にして初めて公徳の人たるなり。公徳とは私徳のフオームを變じたるに過ぎざるものにあらざるなき乎。故に公徳なきは私徳なき證據なり、故に又私徳なければ全然公徳あるべき理なし。公徳と私徳とは一にして只だ其現象を異にせるに過ぎず、されば公徳ある人は私徳ある人にして、公徳の發達せる國家は私徳の發達せる國家たることを斷定することを得るなり。是に由りて公徳心なきは最も卑劣なる人物たることを自白するものなり。

吾か愛する學寮内に怪しきものあり。人の履物や或は傘を無答に而かも永久に借用するものあり。或人は一ヶ月に履物七足も買求せしといふ。或は又無暗に高聲を發し、廊下を走りて人の勉強を妨げ、或は人の勉強時間を犯し、人の安眠を妨害するものあり。吾人は彼等に公徳心あるやを疑はざるを得ず、彼の履物を取るか如き彼等必ずしも盜賊的根姓より出でたるものにはあらざるべしと雖も、彼等は確かに人の迷惑を

思ざる罪は言ひ免るべからず、人の所有を取りて自己の便利を謀り、人の迷惑を顧みず、是を公徳心なき不倫の奴と云はずして果た何とか曰はん。或は細事なりと冷笑するものあらんも、其の細事を犯さざる可からずとは余りに魯劣野卑にあらずや。而して思へ、其の小なるは將に大なるを意味するにあらずや。石川五工門は初より石川五工門にあらずき。彼等固より世の所謂盜賊とはならざる可し、然れども其の思念を以て進まば、彼等が正に社會に立たん日、必ずや人の權利を蹂躪し、自己の義務を忘却し賄賂を取り、所謂今日の政治屋的山師的動物を化像すると火を賭るよりも明なり。人の履物と取るは一見小なるとの如しと雖も、人の所有權を掠奪するといふ点に於て露國の滿洲掠奪と何ぞ擇ぶ所あらん。然るに露國の掠奪に對しては無暗に悲憤を漏らし、非難罵嘲を誠みるに拘はらず、之に於ては何の非難罵嘲も制裁をも加ふることなきは何ぞや。之を非道德的行爲と認識せ

ざるか故か將た或は其の雅量によるか雅量も雅量を過れば非道義的たるものと知らずや。

人の勉強を妨害し、勉強時間を犯すは、人の經營しつゝ、ある事業を妨害すると何ぞ擇ばん。人の安眠を妨害するは國家の治安を妨害するに異ならず。斯の如き、明かに刑の宣告を受くべき者なり。法律上の犯罪者なり之をしも細事といふか、よし又其事小なりとするも惡事たるには相違なきにあらずや。然るを悟として之を爲し、之を問はざるは共に人權の何たるを知らざる道義心なき人類の賊、仁義の敵、惡魔の奴隸なり。吾人は吾が愛する學究生諸君が最も其真心を鋭敏にし、善惡の差別を判斷し、其事の大小とを問はず、苟も、罪惡なりと思ふものは、些も之を犯さず、凜として誘惑の前に抵抗する義憤の人物たらんことを。而して思へ、名譽を博すべき花々しき善事に猛進するよりも諸君が罪惡にあらずと思惟する小惡に猛省することの遙かに優れることを。

「雜 羊」

本六

○悶々錄

△晚近青年の霸氣銷沈、何んぞろの眞意義を解せる者鮮なき、

△必しも杯を手にし肩を怒らし、忼慨淋漓たるを霸氣といはむや、

△世に色厲膽薄の徒あり、外剛内柔の輩あり、これを張古的人物といふ、

△「彼可取而代也」の壯語、色厲なる者も或は云ひ得む、胸に應じ「拔劍斬守首」の實行。膽薄なる者、決して摸するを得じ、

△「余か議院に入らんとするは英國大宰相たらむ爲め」との大言或は外剛なる者の口より出づるを得む四度の落選に挫折せざるは内柔なるもの能は玄、

△已に社會にある先輩の或者は曰く体育を重せよ或者曰く「今二三倍の勉強をなさすばだめ」と如何にして能く此の二要件に適す可きかを解釋し得るものは則甚可、もし已むを得ずんは後を合て前を取らむ乎、

△樽半太陽紙上に嘆息して曰く「風雲の意氣あ
れは天下のこと必ずしも憂ふるを須ぬす」と

△青年の大言放語必ずしも咎むるに足らず、只
空想に耽けるは難すべし、

△社會は實在なり、社會に出でて先づ勇氣沮喪
するは夫の空想家、

△尺蠖屈以求伸也、屈を知らざる者は伸を語る
可からず人多くモルトゲ將軍の武勳一代を掩ふ
を羨み六年少尉の職に孜々たりしを識らす。

○特待生

工學部土木工學科第四年生	鴨居啓三郎
全 機械工學科第四年生	吉本 猛
全 土木工學科第二年生	笠置 正
全 機械工學科第二年生	西岡達郎
大學豫科第一部三年生	白木一雄
	片山秀太郎
	加村光政
	丸山 篤
全 第二部三年生	前原助市

全 第三部三年生
全 第一部二年生

全 第二部二年生
同 第三部二年生

上妻 藤波正 藤波新 青木 阿部讓 今岡信一郎 渡邊唯助 吉岡半吾 池田隆徳

○炊事委員長

本學期炊事委員長左の如く當選せり

講入長 林田 操
保管長 俵 元重
會計長 中井忠三

○學寮會長、副會長

本學期學寮會長副會長左の如く當選せり（但し
十月一日に解任）

會長 片山秀太郎
副會長 原 清明

○新定た寮生規約

舊學年末に變更訂正せられたる新寮生規約は左の如し。

寮生規約

第一章

第一條 寮生は習學寮規則第一條の趣旨を体し特に公共の精神を以て行動し共同生活の美風を發揮し其弊癘を剔除せんことを粉む可し因て其目的を達せんが爲めに左の四項を綱領とす

第一項 衛生に注意し体育を重んず可し

第二項 親睦を旨とし信義を尊ぶ可し

第三項 靜肅を守り勤勉の習慣を養ふ可し

第四項 禮儀を重んじ規律を守る可し

第二章

第二條 寮生の機關として學寮會を設く

第三條 學寮會は各室長各炊事委員長及び雜議部委員一名を以て之を組織す

第四條 學寮會には會長副會長各一名を置き選舉は學寮會員の互選とし任期は各一學期とす

第五條 會長副會長は學寮會整理の責に任す

第六條 學寮會々議は毎月一回舍監臨席の上之を開く
但緊急の場合に臨時之を開會することある可し

第七條 學寮會に於て選舉を行ひ或は決議を要する場合は會員三分の二以上の出席するを要す

但選舉は比較多數決議ハ過半数を以て之を決す

第八條 學寮會は寮生規約を議定し舍監の認可を得たる後之を實行するものとす

第三章

第九條

炊事は自炊とし委員長三名委員二拾一名を置きて其事に當らしむ任期を各一學期とす

但各學期の始終は受買賄とすることある可し

第十條

次學期の炊事委員長は每學期の後に於て學寮會之を撰舉し委員は每學期の始に於て各室一名候補者を選出し抽籤により之を定む但第一學期に限り舊生徒の互選とす

但當選者は自己の便宜を以て辭退する事を得ず

第十一條 炊事に關する萬般の事務は別に定むる所の炊事内規による

炊事内規は舍監及學寮會との合議により制定す

第四章

第十二條

第一條第一項及第二項の目的を達せむが爲め左記十一の運動部を設く

劍術部
柔術部

弓術部

ベースボール部

フットボール部

テニス部

綱引部

相撲部

ラクロース部

遠足部

端艇部

第十三條 各部に部長一名次長二名委員若干名を置く

但各役員は會長の推選とし任期を一學期とす

第十四條 休息室に各種の新聞雜誌を備付く其種類は會長之を定む

第十五條 休息室取締規則は別に之を設け整理の爲め委員四名を置く

但委員は任期を一學期とし會長より委託す

第十六條 第十四條及第十二條各部の費用として寮生より毎月金八錢宛を徴收す

但金費と同時に炊事掛に納付す可し

第五章

第十七條 火災を警戒防禦せんが爲め別に習學寮非常心得を規定す

第六章

第十八條 前條の規定に背くものハ其室長之に忠告し時宜により學寮會長と協議の上會長より更に忠告し尙ほ

改悛せざる時は舍監に具申するものとす

學寮會の決議を経舍監の認可を得又々寮生規約

第四條及第十八條を左の如く修正す

第四條學寮を五區に別ち各區より其の區學寮會員の互撰を以

つて幹事一名を撰舉し任期は各一學期とす。但し該

幹事中に抽籤を以て幹事長一名を定め一ヶ月更代とす

第十八條第一章第一條規定に背くものハ其の室長之に忠告し時宜により幹事と協議の上幹事より忠告し尙改悛

せざる時は舍監に具申するものとす

追て第五條第十三條第拾五條に會長或ハ副會長とあるは幹事と改む

○新任幹事

前記新寮生規約により十月一日記名投票にて五名の幹事を選舉し左の諸氏當選せり。

三塚文藏

林田操

行徳俊則

緒方猪之吉

原清明

職員異動

七月拾二日

陸軍歩兵少尉正八位 早 崎 勲

任第五高等學校教授

叙高等官八等 拾二級俸下賜

七月卅一日

高 田 采 松

工業經濟土木行政法學通論並經濟理論の講師を囑託し年手當

金八百圓下賜

取扱教授に準ず

山田鉦太郎

獨語科の講師を囑託し年手當金六百六拾圓下賜

取扱教授に準ず

教 授 早 崎 勲

工學部實驗工場主任を命ず

教 授 不破 熊 雄

工學部實驗工場主任事務取扱を免す

囑託教員 松原且次郎

自今取扱教授に準ず

八月二日

備外國教師 ヘンリー、エル、フアーデル

本年八月一日より明治三拾五年七月三拾一日迄滿一ヶ年間備

繼る

俎月給は故のし「貳百五拾圓」

備 國教師 フランツ、アブラハム

本年七月三拾一日まで 滿期に付解備せらる

八月三日

磯 山 健

各 通

太 田 爲 治

獨語科の授業を囑託し月手當金四拾五圓給與

取扱助教授に準ず

八月拾二日

清 永 泰 次 郎

任第五高等學校教授

叙高等官六等

八月拾五日

八拾俸下賜

囑託教員 伊 藤 基

依願囑託を解く

八月二拾四日

教 授 本 間 泰 吉

依願免本官

八月二拾六日

教 授 青 木 昌 吉

第二高等學校教授に轉任を命ぜらる

八月二十七日

長澤 泰 知

發動學、機械工學及製圖の講師を囑託し年手當金八百圓下賜
取扱教授に準す

九月二日

教授 山 田 準

第七高等學校造士館教授に轉任を命ぜらる

九月三日

教授 小島伊左美

大學豫科獨語科主任を命ず

囑託教員 上田茂次郎

依願囑託を解く

九月六日

藤原喜太郎

任第五高等學校教授

十給俸下賜

教授 藤 杣 壽 吉

依願免本官

九月十日

教授 鈴木千代吉

農商務技師に轉任せらる

九月十二日

田 川 新 吉

力學材料強弱論及特別講義の講師を囑託し年手當金八百圓下賜

取扱教授に準す

九月十三日

獨逸國人 ドクトル、フリトリヒ、アリ、
ハアン

當校獨逸語及、羅旬語教授として本年九月十日より明治三拾六年七月卅一日迄傭入月俸

金貳百五拾圓給與

九月拾四日

教授 白壁傑次郎

入給俸下賜

助教授 三浦 映 次 郎

六給俸給與

囑託教員 落 合 爲 誠

年手當金四百八拾四下賜

取扱教授に準す

囑託教員 野々口 勝太郎

月手當金三拾五四給與

九月廿三日

松本岩太郎
圖畫及測量の講師を囑託し年手當金八百圓下賜
取扱教授に準ず

九月三十日

教授 長谷川 貞一郎
教授 友田 鎮三

七給俸下賜

拾月三日

教授 近江 幸治

正七位

拾月八日

上村 一孝

任第五高等學校助教授

八給俸給與

佐々 豐 登

任第五高等學校助教授

九 俸給與

○寄贈雜誌錄目

帝國文學

第七卷第六七、八、九號

開成中學校校友會雜誌

第二十三號

第一高等學校校友會雜誌

第百〇八號

百四

學 林

第五十二號

兒童研究

第四卷第三、四號

研瑤會雜誌

第四十三、四號

札幌中學校校友會雜誌

第五號

九州教育雜誌

第百七十三、四、五、六、七、八號

華陽

第二十六號

神田中學校校友會雜誌

第四、五號

島根第一中學校校友會雜誌

第五號

京華中學校校友會雜誌及會員名簿

第九號

中津中學校校友會雜誌

第六號

二十世紀

第五百八十四、六、七、八、五百九

教育時論

第四號

教育公報

第五百八十四、六、七、八、五百九

國士

第二百四十九、二百五十號

六合雜誌

第三三、四、五六號

無盡燈

第二百四十六、七、八、九號

矯矯會雜誌

第六卷第七、八、九號

近江尚商會誌

第七十四號

獨逸語學雜誌

第三年第十一、二號

保惠會雜誌

第七十六號

榮城

第十三號

和國會雜誌

第十三號

風藻

第十七號

丁酉倫理會講演集

第八號